

平安初期の高砂浦と漁民

明石海峡大橋が完成して、夜の舞子辺りの風景は大きく変わりましたが、漆黒の海に浮かぶ漁火には今も昔も変わらない風情が感じられます。

高砂市の高砂の名が歴史上はじめて現れるのは、『経国集』卷十三の「夕に播州高砂湊に次る、一首、淡福良」という題をもつ次の漢詩です。

夕に次る高砂浦 時に風
 暴くかつ寒し 凄凄として
 霜雪を抱く 夜夜にして波瀾
 に宿る 釣火南岸に遥けし
 漁歌北湾に怨む 悲腸寸寸に
 断ゆ 何れの日にか下りて生
 きて還らん

作者の淡福良（淡海福良麻呂）は平安初期の官人で、延暦十六年（七九七）正月に従五位下に昇り、大同元年（八〇六）三月には、従五位上で桓武天皇の葬儀を司る

山作司に任命されています。『凌雲集』の目録によると、彼は従五位下で日向権守とな

っていますので、前述した高砂浦の漢詩も、彼が日向国司として九州へ赴任するさいに作られたものと思われます。

福良麻呂が高砂湊に停泊したのは冬のことだったのでしようが、夕暮れの風は強く、寒気は厳しく、霜雪を抱くように、夜ごと大波の湊に宿つたとあり、いつ生きて帰れるだろうかとまで嘆いているのは、西海へ赴任する彼の不安な心を表しているようです。一方で、釣火（漁火）が南岸遥かに見え、漁歌が北湾に聞こえたというのは、高砂浦を中心とした夜の瀬戸内海的情景を詠んだものとして貴重で、哀調を帯びた漁歌とともに、平安初期の高砂浦とその海上で活動する漁民の姿が蘇ってくるような気がします。

（高砂市史編さん専門委員

西本 昌弘）